

第4回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和2年2月27日（木） 13:30～15:30
場所	青森県庁南棟5階 教育委員会室
出席者	<p>《 委員 》敬称略 8名 中村 まり子 長岡 俊成 吉川 康久 柏谷 至 松本 大 山崎 結子 伏見 憲子 岩本 美和</p> <p>《 事務局 》 5名 葛西 浩一（生涯学習課長） 小舘 孝浩（学校地域連携推進監） 大島 義弘（生涯学習課 企画振興グループ 主任社会教育主事）他1名</p> <p>《 その他 》 2名 山本 洋史（総合社会教育センター 教育活動支援課長） 三浦 博明（生涯学習課 地域連携推進グループ 主任社会教育主事）</p>
内容	<p>1 開 会 2 案 件 （1）先進事例実地調査の報告 （2）社会教育委員の会議における実地調査の報告 （3）答申の骨子案について（重点審議事項1及び3） （4）その他 3 閉 会</p>
配付資料	<p>次第・青森県生涯学習審議会委員名簿・座席図 <資料> 1 先進事例実地調査の概要について【重点審議事項1】 2 先進事例実地調査の概要について【重点審議事項3】 3 社会教育委員の会議における実地調査の概要について【重点審議事項2】 4 答申の骨子（概要） 5 答申の骨子（案）【重点審議事項1】 6 答申の骨子（案）【重点審議事項3】 7 青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議スケジュール</p> <p><参考資料> 1 先進事例実地調査の報告 2 社会教育委員の会議における実地調査の報告 3 青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議 重点審議事項について 4 第1回審議会における意見の整理 5 第2回審議会における意見の整理 6 第3回審議会における意見の整理 7 重点審議事項1の理由書 8 重点審議事項3の理由書 9 県立少年自然の家の利用状況について</p>

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

会長 本日は、前半では昨年実施した実地調査の報告について、後半では答申の骨子案についてご審議いただく予定である。いつも通りの活発な議論をいただければと思う。それでは、案件（1）の先進事例実地調査の報告について、事務局から説明していただきたい。

事務局より、資料について説明。（資料1・2）

会長 それでは、実際に実地調査に行かれた委員の方から感想をいただきたいと思う。まずはプレーパークせたがやについてお願いしたい。

委員 私は子どもの頃に遊んだことがあり、30 数年ぶりに訪れたが、全然変わっていなかった。遊び方から自分で考えることと自分の行動に責任を持つことを、子どものうちから体験できることが、子どもの力を伸ばすことにつながると感じた。また、自己肯定感の向上にもつながると思うので、このような場が青森にもたくさんあればいいと感じた。

会長 私からも感想を述べさせていただきたい。調査に伺ったのは11月初旬だったが、子どもたちからの「水遊びしたい」という声に対して、実際に水遊びが始まり、そのような自由な活動が印象的だった。この調査では、行政との関わりについて、重要な示唆があり、市民主導で始まった活動に、後から行政が活動資金や活動場所の提供などの面で支援する点が大変印象的である。人材育成に関しては、プレーワーカーと呼ばれる子どもたちの活動をサポートするスタッフが、経験を積んだ後、日本各地でのプレーパーク活動に参加するケースも多く見られ、ある種の人材育成の拠点として機能している点も特徴的である。

会長 続いて、オガールプロジェクトについてお願いしたい。

委員 紫波町図書館を中心とした視点で話を伺ってきた。印象的だったのは、「ひろがる図書館」というキーワードで、地域の中にある図書館の「外・人・物」をつなげる様々な仕掛けにより、基幹産業の農業や地域の農家と結びつけた事業が展開されていた。また、図書館が産直などの複合施設群の1つとして位置づけられている点も印象的だった。

会長 続いて、Asobo!Hirakawaについてお願いしたい。

委員 調査に伺った際には、高校生がりんごを使った新商品開発を調理室で楽しそうにやっていた。「楽しくなければやらない」というモットーがこの団体の特徴だと思う。また、自主性を重んじるというところでは、「100の遊びをつくろう」とともに「100人のプランナーを育てたい」というコンセプトも印象的だった。メンバーは多くない

が、楽しく無理なく地域で人材育成をやっている点が、今後の参考になると思う。

委員 様々な事業に取り組んでいるが、基本的には立ち上げメンバーの 3 人の企画に、興味のある高校生が参加する形で行われている。高校生たちの活動は自由で、自主性や可能性を広げるような運営だと感じた。その一方で、大人主導の活動の中で高校生の自主性を育む取組だとも感じた。印象的だったのは「大変なことはありますか」との質問に対する「いや大変じゃありません。自分たちも遊んでいるだけですから」という代表の回答である。そのような考え方がメンバーに伝わっているうちは、楽しみながら実施していける活動だと感じた。

会長 続いて、十和田高校会議所について、お願いしたい。

委員 参加高校生をサポートしている「バラ焼きゼミナール」の畑中氏に初めてお会いしたが、大変熱心に活動している印象を受けた。畑中氏を中心とする周囲の大人たちのサポートで、高校生主体の地域団体が設立され、特産品を含め、地域のことについて学んでいく仕組みは素晴らしいと思う。一方、高校生の自主性という点では、多少弱いような気がする。次代の地域を担う若者を丁寧に育てたいという思いがそこにはあると思うが、高校生の自主性の強い活動はこれから出てくるように感じた。

会長 続いて、十和田子ども食堂について、お願いしたい。

委員 調査に伺った際には、手作りうどん体験に加え、鉄道模型の展示や読み聞かせなど、幅広い年齢を対象に楽しめる工夫が見られ、単に食事の提供のみにとどまっていない点が大変印象的だった。また、企画においては、代表のリーダーシップのもと、運営メンバーがそれぞれの個性を生かして活動しているように感じた。今回のケースは、若者が主体となった活動を大人がフォローするというよりも、リーダーを中心とした大人の活動に若者も一緒に加わっていると捉えている。

委員 私は、十和田子ども食堂の実行委員の 1 人なので、いろいろアイデアを出していきたいと考えている。リピーターの中には、実行委員同様に積極的にサポートして下さる方もいるので、今後は、学生や地域住民の積極的な参加を促すことで、活動の幅がさらに広がっていくことを期待している。

会長 続いて、梵珠少年自然の家についてお願いしたい。

委員 昭和 46 年の開所なので、老朽化がかなり進んでいる。利用者からは、「部屋にコンセントがなく、携帯電話の充電に不便」との声があるそうだが、逆に何も自然の中での活動は貴重な体験だと思う。また、低廉な利用料金も利点の 1 つである。野外での体験活動では、安全面を含めて、多くの人手を必要とするので、ボランティアの養成にさらに取り組んでもよいと考える。バラエティーに富んだ事業が実施されている反面、小学校の利用がほとんどで、中高や大規模な利用が難しい状況なので、県教育委員会との連携の中で、利用の幅を広げることができれば、青少年の体験活動の拡大につながると思う。

委員 老朽化を含め、施設のハード面の課題が大きいと感じた。安全管理にも熱心に取り組む、工夫を凝らした主催事業が行われているので、全体の利用における主催事業の

割合が少ないところがあったのではないと感じた。

会長 続いて、種差少年自然の家については、私から感想を述べさせていただきたい。

会長 運営面では、県直営の梵珠少年自然の家と異なり、指定管理者制度が導入されていることによるプラス面がいくつか見られた。プログラムの実施においては、出前講座が全体の利用の4割を占め、小学校の宿泊研修よりも利用機会が多くなっている。他方、主催事業では、例えば特別支援学校と小学校による同日の利用や外国人研修生と小学生と一緒にキャンプファイヤーを行う活動も見られ、これからの社会に求められるダイバーシティ的な面も一つの利用の在り方だという印象を受けた。

会長 案件（1）については、以上となる。続いて、案件（2）社会教育委員の会議における実地調査の報告について、事務局から説明していただきたい。

事務局より、資料について説明。（資料3）

会長 案件（2）については、調査施設が多いので、特筆すべき点について御意見があればお話を伺いたい。

委員 6件の調査に参加したが、予算の面では、施設によってかなり差があると感じた。潤沢な予算があれば、様々な取組を展開することが可能であるが、少ない予算であれば、取組は限られたものとなるので、取組を単純に比較することは難しいと思う。特に大きな施設であれば、職員数が揃っているが、小さな施設では、職員数も限られている。さらに、交通の便が悪く、児童・生徒の減少が著しいところでは、出前での講座の実施が必要となってくるので、継続的に施設に集客することが厳しいと思う。そのような小さな施設において、限られた人数の職員で、将来的な方向性を生み出していくのは非常に難しいと感じている。今後の社会教育施設の配置や役割については、広く全体的な視点が必要だと考える。

会長 他に御発言がないようなので、ここからは重点審議事項1と3に関して、御意見をいただきたいと思う。報告を伺っていて思ったことは、重点審議事項1の実施調査としては、ちょっと年上の大人がより下の年代の高校生をサポートするという形で活動が行われていて、そのようなちょっと年上の大人たちの役割が非常に重要だということである。他方、何名かの委員から指摘があったが、大人の手厚いサポートにより、若者のイニシアチブが見えにくくなっている部分もあるようである。また、重点審議事項3では、施設の老朽化が大きな課題として上がっている一方、それぞれの施設で、与えられた条件の中でいろいろ工夫した取組が見られる。以上の点を含めて、御意見を伺いたいと思う。

委員 重点審議事項1の事例では、高校生が主体となつての活動というよりは、ちょっと上の大人が中心となつた活動に高校生を巻き込んでやっている。そのような環境は、必ず高校生の意識に残っていると思う。コーディネートされる側だった高校生が、社会人になった時にはコーディネートする側になって活動に関わっていくような期待が持てる活動が多く、今後の地域を担う人材の育成に関して、直接的というよりは種まきの形で貢献していると感じた。

委員 高校生の自主性という点での成果は、すぐに現れるものではないと思う。高校生の心のどこかに活動に対する思いが残っていて、いずれは地元に戻って、今度は自分がコーディネーター役や高校生の世話役になるという形が継続していけばいい事例だと思う。また、先ほどの報告の中でネット会議の話が出てきていたが、多忙な高校生が参加しやすくなる点や高校生の得意なことを生かす点で大変有効だと思う。

会長 プレーパークせたがやについて、これまでの話題と絡めてお話しすると、人材育成に関して、三層構造になっている点が特徴的である。子どもたちの活動をサポートするプレーワーカーの育成では、かつてプレーワーカーだった地域の大人が研修に大きく関わっている。適性のない人には、研修のプロセスで辞めてもらうこともある。まずは、子どもたちがいて、その上にちょっと年上のプレーワーカーがいて、さらにその上に、かつてプレーワーカーとして活動の中心として関わっていた大人たちがいて、その三層がうまく連携していると感じた。

委員 ネットワーキングという活動の仕方があるが、これは小さなミッションごとに人が集まり、終われば解散するというものである。Asobo!Hirakawa の事例では、そのことを強く感じた。そのネットワーキングが地域社会の中にあることで、より人のつながりがつくりやすくなり、また、自由な発想や自主性を持って社会教育活動が展開できると思う。また、代表のリーダーシップによる活動はマイナス面ばかりではないと考える。地域活動におけるロールモデルをつくった先に、カリスマ的なリーダーを求心力にして、行政と民間の協働を含め、地域全体で人材育成を行っていくことは、1つの成功事例になると思う。

会長 ここまでの議論の中で、青森にこれだけの活動のベースができている点は大変ポジティブに評価すべきだと思う。その一方で、一部のカリスマ的なリーダーに頼ることのメリットデメリットを十分認識した上で、新しい人材育成のあり方を考えることも重要な視点の1つだと考える。

会長 休憩の前に、重点審議事項3についても御意見をいただきたい。調査の報告から、特徴的な取組や課題が見えてきたが、民間を含めた幅広い連携という視点についても御意見をいただければと思う。

委員 施設の課題として、水道の数の不足などの不便な点について指摘があったが、安全面と衛生面での整備がしっかりできていれば、逆にそれらの不便な点は丁寧に整備する要がないと考えている。受け入れ人数が減ってしまうのであれば残念だが、不便な環境でどのように工夫するかが非常に大事だと思うので、むしろそのような環境が必要だと考える。また、普段と違う環境でいろいろな子たちと一緒に活動することが大事である。周囲に気を使いながらの共同作業やリーダーやサブリーダーなどの様々な役割を担うことが子どもたちの成長につながると感じた。

会長 施設に関しては、予算も限られているので、大変重要な視点をいただいたと思う。学校との連携の在り方に関しても御意見をいただきたい。

委員 学校の利用を促進するために、日程調整に関して教育委員会との連携が大事になると思う。その上で、受け入れ事業の整備について考えてもいいと思う。また、種差少年自然の家の事例を伺い、活動を通じた利用者間の交流が効果的な取組につながると

感じた。ボランティアの育成に関しては両施設で取り組んでいるが、活躍の機会を施設の外にもつくり出すことができると、ボランティアの活用の幅の広がりや学習の循環に発展していくと思う。さらにキャパシティに関しては、両施設でどの程度の差があるかはわからないが、梵珠少年自然の家では、1校ごとに1泊利用するだけで平日の利用はほぼ埋まっているという話を伺った。

会長 種差少年自然の家の調査では、2泊3日の利用を勧めたいが、学校の都合で1泊2日の利用が多くなっていると伺った。また、これまでの話で、施設間での情報交換はあまり多くないと感じた。種差少年自然の家の調査では、上北地区にある小川原湖青年の家のことはあまりよく知らないような印象を受けた。種差少年自然の家では、上北地区からの出前講座を多数受け入れていることもあるので、施設間の情報共有がさらに進むことによって、施設が抱える課題解決のヒントにつながることもあると感じた。

委員 私が住んでいる上北地区では、基本的には小川原湖青年の家での自然体験学習が行われていると思う。ただ、種差少年自然の家に関しては、夏休みや冬休みの利用を含め、チラシなどを通じての情報提供があるので、それが上北地区からの利用に結びついていると思う。

委員 下北地区のむつ市下北自然の家では、小中高生以外にも幅広い年齢の方々を受け入れている。その中では、夏場のキャンプサイト有料開放やジオパークの拠点としての活動も見られるので、利用の促進について、青少年教育施設間の情報共有は有益な面があると考えます。また、民間の小川原湖自然楽校では、積極的に出張しての自然体験活動が行われているなど、民間の活動も参考になる点があると感じています。また、食事を提供する上での人手不足の話も聞くこともあるので、受け入れの状況についてももう少し施設から話を聞いてもいいと思う。

(休憩)

会長 それでは、案件(3)答申の骨子案について審議していきたいと思う。まずは事務局から資料の説明していただきたい。

事務局より、資料について説明。(資料4~6)

会長 説明のあった答申の第一章と第三章の構成や内容について、御質問や御意見をいただきたい。

委員 オガールプロジェクトは、重点審議事項1の調査で唯一の社会教育施設となる。この取組では、単に市民が活動できる場を提供しているだけでなく、産直と連携してメニュー本のPOPをつくるなど、市民の生活と関連させながら積極的に地域づくりに取り組んでいる点が重点審議事項1に関連していると感じた。

委員 キーパーソンの育成に関しては、最初からキーパーソンを育てるという趣旨でアプローチすると遠慮する人が多いと思う。現在、団体のリーダーをやられている方々も初めは簡単な役割を果たす中で、徐々に重要な役割を担うようになり、成長していったのだと思う。人材育成の観点としては、いろいろな気づきを与える機会の提供が重要な視点の1つだと思う。地域の若者の意見交換レベルから始めることが、遠回りか

もしれないが大事だと感じている。

会長 今回の調査からも、もともとは自身がプレーヤーとして関わっていく中で、周りを巻き込んでいるケースが見られる。気づいたらキーパーソンやコーディネーターを担っていたことが多いのだと思う。

委員 食と地域コミュニティがつながることで、いろいろなことが生まれると感じている。特に自分が生まれ育った地域の特産品や慣れ親しんだ味には、活動を持続可能なものにする力があると感じている。さらに食だけでなく、常日頃から体験しているようなことも持続可能な地域づくりにつながっていく部分があると思う。そのような内容も盛り込んでいけばいいと考えている。

会長 オガールプロジェクトの報告の中で、「多目的は無目的」という言葉があったが、例えば食や本といった具体的な切り口からの取組の方が、逆に広がりのある人材育成や地域づくりにつながる可能性は高いと思う。

会長 先ほど、青森にも若者を支援する活動に関わる方が増えてきたことを申し上げたが、ぜひ答申に取り入れていただきたいと思う。今まではそのような活動をゼロからつくっていく議論が多かったと思うが、状況が変わり、民間でのいろいろな取組が行われるようになり、どのように支援するかを考える段階にきていると思う。青森県全体の方向性からしても非常にポジティブな動きだと思う。今あるものを生かすことで、効果は非常に大きくなることを、ぜひ盛り込んでいただきたい。

委員 第一章（２）の「本県の若者と地域をめぐる課題」で、「まずは大人が楽しんで学ぶ」とあるが、若者や子どもたちの支援に大きな影響を与えるのは親だと思うので、「親」についても記載していただきたいと思う。

会長 親、または親以外の大人から巻き込まれる２つのパターンがあると思うので、両方を記載できればいいと思う。

委員 第一章（１）④の中で、地域コミュニティについて述べられているが、年配の方が多いことによって若者が参加しない判断材料になっている部分があると思う。最近の若者は、近いところのつながりが社会だと思っている人が多いので、そのような若者をどのようにして地域コミュニティに関わらせていくかが課題だと思う。また、この状況は多くの親が自分の目の届く範囲で子どもを遊ばせていた結果だと思うので、いろいろな社会性を学べる場所に子どもをうちから連れ出すことが大事だと考える。

委員 地域をまとめる作用が強いと、それをしがらみに感じて閉塞感が強くなり、遠心力のように離れていってしまう若者が少なからず地域にいて、その原因を少しでも解消していかないと地域はどんどん衰退していくと思う。地域にある様々なコミュニティをブリッジするのがコーディネーターでありキーパーソンだと思うが、大事なことは、ブリッジする視点を持った人が地域の中に多くなっていくことだと思う。そのような人たちの活動が、地域におけるテーマコミュニティにつながり、そのテーマが若者の関心の強いものであれば、自然とそこに若者がつながっていく。今後の地域づくりを考える上で、１つの大きなテーマだと考える。

会長 おそらく簡単に結論がでないことだと思う。地域をまとまる役割と地域を超えてつながる役割のどちらも必要だと思うので、両方のバランスを見る必要があると思う。

会長 第三章に関して御意見をいただければと思う。県立少年自然の家以外の意見も含めて伺えればと思う。

委員 第一章にも関連することだと思うが、自然体験そのものをどう充実させていくのかということよりも、子ども同士や子どもと大人といったコミュニティや関係性をどのようにつくっていくのかということを強調した方がいいと思う。

会長 体験活動が単なる体験活動で終わらないように、広がり意識することは大事だと思う。

委員 第一章、第三章に共通することで、会議の中でボランティアの在り方や学校や地域との連携などいろいろな意見が出ているが、「誰が」「どのようにやる」といったところを明確にできると具体的な実施につながっていくと感じた。

委員 自然体験活動については、新学習指導要綱の内容を考慮した上で、小中高を通じた活用につながっていけばいいと思う。

会長 青少年教育施設については、カバーしているエリアを確認した上で、キャパシティに関連する課題を考えてもいいかと思う。どこかのタイミングで全体を見渡した整備が必要だと思うが、この審議会ですこまで踏み込むかどうかは別として、項目の一つとして検討してもいいかと思う。

会長 それでは、案件(4) その他ということで、今後のスケジュールについて事務局から説明をしていただきたい。

事務局より、今後のスケジュールについて説明。(資料7)

3 閉会

(内容省略)